

ち切りだった。二昼夜の航海で舞鶴港に入港したが、一部グループ（民主）が船員が自分たちの米をごまかしたということ（事実不明）で船からおりることを拒み、全員を道づれとして一昼夜ほど上陸が遅れた。やっと上陸できたときのうれしさ、迎えてくださった皆様の温かいまなざしは何とも言えない。

上陸後宿舍内で赤飯をいただいたそのときの舌ざわりの米の飯の味は、現在の何でもある食物の中にあって、この味に追いつくものがない。

シベリア抑留生活の苦勞

新瀉県 関本 清

入ソ初期の苦勞

我が部隊は九月二十七日四平街昌図で武装解除され、四平街十五作業大隊を編成した。ウラジオストック經由で日本へ帰すというソ連の言葉を信じ貨車に乗り込んだ。貨車輸送の途中糧秣廠のところで列車を停止させ

「日本へ帰れば何もいからでできるだけ持って帰った方がよい」というソ連の言葉をまに受け、各中隊から使役を出して糧秣を空車に積み込んだりもした。

十一月三日黒河省孫呉に到着、アムール河の結氷を待ち二十八日よいよアムール河結氷。「貨車の物資を三十日までに運べ」というソ連の指示により、各人は飯を食うときと便所に行くとき以外それこそ昼夜休みなく手製のそりやブリキ板を利用して対岸のブラゴエシチュenskまで運んだ。

十二月一日、ブラゴエシチュenskを出発、列車はいよいよウラジオストックに向かって進むはずであったが、途中で進行方向が違うのに気がつき大騒ぎとなる。

列車はまる四日走って着いたところはバイカル湖の少し手前のウランウデという小都市であった。向こうを見ると有刺鉄線を張りめぐらせた収容所が冷然とかまえていた。

日もとつぷり暮れたころ物資の車おろしも終わり収容所内の大きなドームに入れられ、私物検査を受けた。全員の検査が終わったのは午後の十時を回ったころだっ

た。

シベリアの十二月の気温は零下三十度以下である。だけれども早く温かい床にはいつて寝たいと思ったに違いない。しかし「今夜はこのドームで寝ること。明日からは作業があるのでなるべく早く休むように」と命令された。皆は、あ然としてブツブツ不平を言いながらドームのコンクリートの上に持って来た毛布を敷き服を来たまま横になり、交互に人と足を組んで暖をとり、防寒外套などありったけのものをかけてようやく眠りについた。

幾らか寝たかなと思っているうちに全員起床という。外はまだ薄暗い。これから作業に行くのだという。一日ぐらいは環境の整理をさせてくれるだろうと思っていたが着いた翌日、しかも暗いうちからはあんまりだと思ったが、捕虜の身となつてはいたし方ない。そのうち朝食に上がってきたものが各人の飯ごうに分配されたが、それがまた皮のかぶった燕麦をどろどろに煮たおかゆのようなもので、しかもかけごうに一杯ぐらいだけ。どうして食べたらいいかと迷ったが、とにかく口の中に入れてぐにゃぐにゃかんで汁だけをのどに通し、皮は飯

ごうのふたにベッペと出した。なにせかけごうに一杯の量である。その半分は皮だから腹のどこに入ったかわからない。その上寒さも厳しく飯ごうのふちについたのり状のものが食べ終わるころはもう凍るほどであった。

昼食に配給されたのが同じく燕麦の粉を焼いた厚さ三センチぐらいの黒パン一切れ、おかずなどもろろんない。その黒パンを洗いもしない飯ごうにほうり込んで外に出て整理した。なかなか人員の掌握できないソ連兵にじらされやつと出発して小一時間歩かされ着いたところはれんが工場だった。みなの防寒帽の毛には吐いた息が凍りついてさながら霜の中から顔を出しているようであった。

そこで粘土掘りをさせられたが、ツルハシとスコップを渡されて粘土を掘ってみたが、凍った土にツルハシの先が一センチほど入るだけでとても掘れるものではない。監督はブイストレ、ブイストレ（早く早く）、ダワイ（ダワイ（やれやれ）と目を血走らせて尻をたたく。それもそのはず粘土が行かなければ工場の機械がから回りをするのである。酷寒のシベリヤでもしまいに上着を脱

いでも汗の出るほどにツルハシを振るったが、掘れる土はわずかであった。

飢餓、生活極限の状態

毎日そんな仕事を繰り返しているのではおほこけ、目はくぼみ、足はフラフラで、小さな石ころもつまずいて転んでしまうほどであった。病人も出た。なかでも神経痛はソ連の軍医は血も出ないし熱もないと言って作業に追い出した。顔なんかめつたに洗わなかった。水も乏しく湯などももちろんない。ノルマが上がらないもんだから食糧は少ない。いつも腹を減らして餓鬼道をさまよう亡者のように、食べられそうなものはネズミでもカエルでも食べた。夕食時に配給になる翌日の昼飯用のパンはまず例外なくその日のうちに食べてしまった。手もとに食べ物があると気にかかって我慢できないのである。翌日の昼は何もないから岩塩で塩汁をつくりそれを飲んで我慢した。春になって草が芽を出すと、それをつんで煮て食べた。ジャガイモの取り入れ後の畠に落ちている小指の先ほどのジャガイモも拾って食べた。すでに腐りかかっているでもその腐った部分をナイフで切り落とすとい

いところまで切ってしまうので、水の中で腐った部分を指先でかき取りそれを飯ごうでゆでるのである。腐った臭いがプンプンしているがそんなものは平気であった。

そんな食糧状態だから病気になるとなかなか治らない。しまいには後ろから鞆丸が見えるくらいやせて死んでいった。そのやせた体の血をシラミがようしゃなく吸った。感がにぶっているのでかゆくはないが、衣服を持って振れば太ったシラミがバラバラと落ちた。

帰国

毎日語り合うことといえれば帰ることと、帰ったら何を食べるかということばかり。そんな長かった抑留生活も二十三年八月帰国することになった。名前を呼ばれた順に並ぶのであるが、自分の名前を呼ばれるまでは心配だった。名前を呼ばれたときは思わず大声で返事をして、帰国者の列に駆け込んだ。

帰国船は信洋丸。港を出て一日たったら、あっちこちで日の丸組と赤旗組の殴り合いが始まった。三日目の朝、目を覚すと船は舞鶴の港に停泊していた。緑の濃い風景を眺め抑留生活に別れを告げる喜びをじいっと心の

中で味わいながら上陸の指示を待っていた。

私のシベリア抑留の思い出

新潟県 遠藤新吉

私は、昭和十九年十月当時の満州牡丹江省東寧県石門子にあった野戦重砲兵第十七連隊に入営した。この地は、東滿国境（満州、朝鮮、ソ連）地帯といわれ当時の関東軍にとって、戦略的な拠点として重要な位置のところでされていたという。肉眼で見える国境の山々はソビエト領であり、時々陣地構築するソ連兵が見え隠れする地だけに、初年兵の私たちにとっては実に不気味の思いで厳しい訓練の日を過ごした。

やがて私たちの舞台は、昭和二十年五月、満州のほぼ中央にあたる四平街へ移駐したのであった。

同年八月九日、突如として日ソ開戦、すでに敗色濃厚な関東軍は、その指揮命令系統を失い、士気の低下によって戦わずして八月十五日の終戦を迎えるに至ったの

である。

軍隊生活まる一年も満たないうち終戦、やがて怒濤のごとく南下したソ連軍の下に集結を命ぜられ、さらに武装解除させられて見るも哀れな無力な集団と化したのである。

そして長い長い抑留生活が始まった。

大陸の冬は早い、やがて私たちは「帰国」を固く信じその年の秋には貨物列車に何十日も乗せられ、ソ満国境の町愛琿に集結させられた。この町は黒河（アムール河）という国境を流れる河の沿岸の町であって、河向こうがソ連領ブラゴエシチェンスクである。

十一月半ばになるとこの国境の河が一夜にして結氷し、この河の上を膨大な満州国から捕獲した物資を自動車であるいはそりで運び出した、この搬送に昼夜の別なく労働させられた。

何日かたったであろうか、私どもの集団はブラゴエシチェンスクの駅から二段に仮設した貨物列車に乗せられ、シベリヤ鉄道を走ったのであるが、お粗末な輸送計画であろうか、半日走って三日も四日も停車するという